

# 欧陽脩『洛陽牡丹記』について

渡部雄之

## はじめに

北宋の文人欧陽脩（一〇〇七—一〇七二）の書いた文のうち、「……記」と題されるものは三十九篇あり、うち十八篇は『居士集』の卷三九と四〇に、二十篇は『居士外集』の卷一三に収められているが、残りの『洛陽牡丹記』一篇は『居士外集』卷二二に載録されている。『洛陽牡丹記』については、こうした載録卷の違いのほか、全体を花品序第一、花釈名第二、風俗記第三の三部に分けた体裁となっていること、また内容が洛陽に咲く牡丹の品種や栽培法について細かく列挙し論じた、牡丹の研究書のようなものとなっていることなどがその特徴として挙げられる。山本和義氏は、『洛陽牡丹記』<sup>3</sup>のかかる特徴を捉えて次のように述べられる。

『洛陽牡丹記』は当時の洛陽で栽培されていた牡丹の各品種を記載するものであるが、そこには近代の博物学につながる学問的姿勢が窺いうるのであって、もっぱら薬効などの有用性の側面から記述される

本草学とは異なる一面を拓いており、万物が等しい自然観に通底している。……欧陽脩以降の宋人の著作に、多く「……記」「……譜」（図録）を書名に掲げる博物的業績が認められるのは、その後継と看做してよい。

欧陽脩が学問の幅の広い人物であることはよく知られる。『新唐書』、『五代史記』といった歴史書を編纂すると同時に、儒家の經典を考証した『詩本義』や『易童子問』三代以来の金石や遺文を集めた『集古録』を執筆し、史学、経学、金石学に大きな足跡を残した。『洛陽牡丹記』もまた、そうした広範な学問の一端を窺わせる作品であり、「近代の博物学につながる」新たな一面を切り拓いたものと言える。

とはいえ、同じく「記」と題されている他の三十八篇と比較した場合、構成、題材における差異はあまりに大きいように思われる。確かに『洛陽牡丹記』の分析的な筆致は、彼の多くの作品に共通して見られる理知主義の

表れとも言えるものであるが、それだけでは説明がつけられないほど、『洛陽牡丹記』は異質な作品である。また、山本氏が述べられる「本草学とは異なる一面」という部分に関しては具体的な記述が見られず、他の先行論においても、『洛陽牡丹記』を宋代の特色を持った花譜の嚆矢とみなすことは変わらないが、では如何なる点がこの作品の新しい点なのかということについては、論述がなされていない。

そこで本稿では、『洛陽牡丹記』の「記」としての異質性に着目するとともに、これが前代の文学の如何なる流れを承けて著されたのか、また後世はこれを如何に継承していったのかという、文学史における位置付けという観点から考察を行う。

## 一 版本の問題

『宋史』卷二〇五「芸文志」子類・農家類を見ると、『歐陽脩『牡丹譜』一卷」とある。これは『洛陽牡丹記』と同じものを指すのであろうか。また『直齋書録解題』卷十「農家類」には次のようにある。

『牡丹譜』一卷、歐陽修撰。少年爲河南從事、目擊洛花之盛、遂爲此譜。蔡君謨書之、盛行於世。

『牡丹譜』一卷、歐陽修撰。少年にして河南從事爲り、洛花の盛んなるを目撃し、遂に此の譜を爲す。

蔡君謨之を書し、世に盛行す。

「河南從事爲り」とは、天聖九年（一〇三一）三月から景祐元年（一〇三四）三月までの三年間、歐陽脩が西京留守推官として洛陽に赴任していた時期を指す。年齢で言えば彼の二十五歳から二十八歳の時にあたる。続く「洛花の盛んなるを目撃し、遂に此の譜を爲す」の部分に関しては本文の花品序第一に、また「蔡君謨之に書し」一句は「牡丹記跋尾」（『居士外集』卷二二）にそれぞれ記載がある。これらのことから、『直齋書録解題』及び『宋史』芸文志に見える『牡丹譜』一卷」と『洛陽牡丹記』とは同一の作品を指しているであらうことが分かる。

では、題を異にするこれら二作品について、他に何か違いはあるのだろうか。『四庫全書總目提要』卷一五「子部・譜録類」『洛陽牡丹記』には、

『洛陽牡丹記』一卷、宋歐陽修撰。……宋時尚別有一本、『宋史』藝文志以『牡丹譜』著錄而不稱『牡丹記』、蓋已誤承其譌矣。

『洛陽牡丹記』一卷、宋歐陽修撰。……宋の時尚は別に一本有り、『宋史』藝文志『牡丹譜』を以て著録して『牡丹記』と稱せざるは、蓋し已に誤りて其の譌りを承く。

とあり、宋代には『洛陽牡丹記』を題とする作品の他、別系統の一本があり、『宋史』芸文志では『牡丹譜』と記

載されていると言う。そして重要なのは、その一本が誤りとされている点である。つまり、右に見た『宋史』芸文志及び『直齋書錄解題』記載の『牡丹譜』一卷」と、『洛陽牡丹記』と題する作品とは別物であると、『四庫提要』は断じているのである。『四庫提要』が基づいているのは、『歐陽文忠公集』巻七二（『居士外集』巻二二）所収の『洛陽牡丹記』に附された次の校勘記である。まずは前半部を挙げる。

士大夫家有公『牡丹譜』一卷、乃承平時印本。始列花品序及名品、與此卷前兩篇頗同。其後則曰「叙事、宮禁、貴家、寺觀、府署、元白詩、譏鄙、吳蜀、詩集、記異、雜記、本朝、雙頭花、進花、丁晉公續花譜」、凡十六門萬餘言。前題吏部侍郎參知政事歐陽某撰、後有梅堯臣跋、蓋假託也。姑以三事明之。

士大夫の家に公の『牡丹譜』一卷有り、乃ち承平の時の印本なり。始め花品序及び名品を列し、此の巻の前兩篇と頗る同じ。其の後には則ち「叙事、宮禁、貴家、寺觀、府署、元白詩、譏鄙、吳蜀、詩集、記異、雜記、本朝、雙頭花、進花、丁晉公續花譜」と曰ひ、凡そ十六門萬餘言。前に吏部侍郎參知政事歐陽某撰と題し、後に梅堯臣の跋有るは、蓋し假託ならん。姑く三事を以て之を明らかにせん。

當時士大夫の家には『牡丹譜』一卷があり、「承平

の時」、すなわち北宋時代に刷られた版本であつた。<sup>(5)</sup>その構成は、前半に花品序と名品が置かれ、それぞれ『歐陽文忠公集』に収める『洛陽牡丹記』の、花品序第一、花積名第二によく似ていたという。一方、後半には叙事、宮禁、貴家といった、現在の『洛陽牡丹記』には見られない部立てがあり、合わせて十六門、総字数一万余りであつたという。また作品の頭には欧陽某という撰者名が、末尾には梅堯臣の跋文があつたらしい。以上の紹介を行った上で、校勘者はこれを欧梅二氏に仮託したものだと指摘し、以下に三つの根拠を挙げて論証する。後半部を引用する。

公之花釋名大槩謂、「自唐則天已後、洛陽牡丹雖盛、然沈宋元白未嘗形容其美且異、劉夢得亦止云一叢千萬朵而已。」蓋言今之名品當時未有、而此乃以元白常唱酬為一門、一也。花譜、蔡君謨所書、至今流傳。熙寧元年、公跋云「君謨絕筆於斯文。」安得此萬餘言者、二也。梅之後序云、「公初筮西洛作花品。及參大政、亦有謝西京王尚書牡丹詩。」案梅以嘉祐五年四月卒、是冬公方入西府、明年遷參政。其妄尤甚、三也。此初無足辨、特以印本流傳、恐後人或信耳。

公の花釋名に大槩謂ふ、「唐の則天自り已後、洛陽の牡丹盛んなりと雖も、然れども沈宋元白未だ嘗て其の美にして且つ異なるを形容せず、劉夢得も亦た止だ一叢千萬朵と云ふのみ」と。蓋し今の名品は當時

未だ有らざるを言ふも、此れ乃ち元白の常に唱酬するを以て一門と為すは、一なり。花譜は、蔡君謨の書する所にして、今に至るまで流傳す。熙寧元年の公の跋に「君謨筆を斯文に絶つ」と云ふ。安んぞ此の萬餘言を得んとは、二なり。梅の後序に云ふ、「公初め西洛に篋して花品を作る。大政に參るに及び、亦た謝西京王尚書牡丹詩有り」と。案するに梅は嘉祐五年四月を以て卒し、是の冬、公方に西府に入り、明年參政に遷る。其の妄なること尤も甚しきは、三なり。此れ初めより辨ずるに足る無きも、特に印本の流傳するを以て、恐らくは後人或いは信ずるのみ。

一つ目は、『牡丹譜』元白詩の部で述べられる内容が、前半の花釈名における記述との間に齟齬を生じていること、二つ目は、歐陽脩の友人蔡襄（君謨は字）が書したとされる「花譜」が校勘者の時代にまで伝わっていたが、歐陽脩の跋文によれば、蔡襄は『洛陽牡丹記』の風俗記第三を絶筆としたことから、他に一万言余りも記述が存在するはずはないということ、三つ目は、巻末に置かれた跋文は、時期の上で梅堯臣が書いたとは考えられないということ述べている。以上三つの根拠から、『牡丹譜』の信ずるに足らぬことを明らかにしている。最後に校勘者は、『牡丹譜』が誤った版本であることは元來述べ立てるまでもないことなのだが、現在この版本が一般に流布しているため、後人に誤信する者がいるからだ、校勘

記執筆の理由を記して結んでいる。この論証は非常に合理的で信ずべき説であるように思う。周必大を始めとする『歐陽文忠公集』の編者たちは、嚴密な考証の末、一般に通行する版本ではなく、現在伝わる文章を、より正しい姿を留めたものとして載録したのである。

では、この誤った版本はいつごろどのようにして現れたのであろうか。そこで、本節のはじめに挙げた『直齋書錄解題』の記述を振り返ってみると、歐陽脩が作った牡丹の「譜」を蔡襄が書したことによって、作品が世に広く行われるようになったという。蔡襄の書した時期については、現存する資料からある程度絞り込むことができる。まず、『洛陽牡丹記』に附された「牡丹記跋尾」には次のようにある。

（蔡君謨）平生手書小簡、殘篇斷稿、時人得者甚多、惟不肯與人書石、而獨喜書余文也。若「陳文惠公神道碑銘」、「薛將軍碣」、「真州東園記」、「杭州有美堂記」、「相州畫錦堂記」、余家「集古錄目序」、皆公之所書。最後又書此記、刻而自藏于其家。方走人於毫、以模本遺予。使者未復於閩、而凶訃已至于毫矣。蓋其絕筆於斯文也。

平生の手書小簡、殘篇斷稿、時人得る者甚だ多きも、惟れ肯へて人の與に石に書せずして、獨り余の文を書するを喜ぶのみなり。「陳文惠公神道碑銘」、「薛將軍碣」、「真州東園記」、「杭州有美堂記」、「相州畫錦

堂記」、余の家の「集古録目序」の若きは、皆公の書する所なり。最後又た此の記を書し、刻して自ら其の家に藏す。方に人をして毫に走り、模本を以て予に遺らしむ。使者未だ閭に復らずして、凶訃已に毫に至る。蓋し其れ筆を斯文に絶つなり。

蔡襄は好んで歐陽脩の作品をいくつも書にしていた。それらの中で最後に書かれたのが『洛陽牡丹記』であり、彼はその書を刻し家に藏していた。歐陽脩は使者から蔡襄が書いた『洛陽牡丹記』の模本を贈られたのだが、時を同じくして彼の訃報に接した。そのためこの作品が蔡襄の「絶筆」となってしまったという。蔡襄の没年は治平四年（一〇六七）であり、また彼が書したものとして挙げられる歐陽脩の他の作品のうち、最も後に作られた「相州昼錦堂記」（『居士集』巻四〇）の制作年が治平二年（一〇六五）であることから、蔡襄が『洛陽牡丹記』を書いた時期は一〇六五―一〇六七年の間であると考えられる。

『直齋書録解題』の説に従って考えれば、世に通行した版本は、この時期に蔡襄が作品を書いたことを契機として単行本として世に広まったものと言える。ただし題については、蔡襄が書した時点で『洛陽牡丹記』とされていたのか、あるいは『牡丹譜』とされていたのか、現在のところ断定するのは難しいが、『牡丹記跋尾』の中で「最後又た此の記を書し」と書かれていることを踏ま

えれば、蔡襄は原題通り『洛陽牡丹記』としていた可能性が高い。

一方で、『直齋書録解題』や『歐陽文忠公集』編纂の頃には、蔡襄の書いた作品は『牡丹譜』として伝承されていた。ではいつ頃改題が行われたのかという点、校勘記が『牡丹譜』を北宋に刷られた版本であると記していることから、時代が南宋に移る建炎元年（一一二七）以前というところまでは絞り込めよう。また内容についても、次第に増幅が行われていき、ついにはおよそ十六門、総字数一万余りの体裁となった。

以上のような、題、内容ともに手が加えられた誤った版本が流布する一方で、題、内容ともに本来の『洛陽牡丹記』や、題だけが『牡丹譜』（もしくは『洛陽牡丹譜』）に変えられた版本もまた同時に伝承されていった。前者については、『歐陽文忠公集』編纂の過程で選択された、現在伝わるテキストや、南宋・鄭樵『通志』に見える『洛陽牡丹記』一卷歐陽修撰がそれに当たるだろう。後者については、『歐陽文忠公集』の編纂が行われた紹熙二年（一一九一）―慶元二年（一一九六）以前の文献について見ると、例えば南宋・陸游（一一二五―一一八〇）の『天彭牡丹譜』が『洛陽牡丹記』の花品序第一、花釈名第二、風俗記第三という体裁を踏襲していること等から窺える。

このように、当時は少なくとも三つの版本の流れが存在していたと思われる。そして、周必大らが本来のテキ

ストを定めるに至り、以降はそれが決定版として人々の間に定着していった。同時に、従来見られた他のテキストは消滅してゆき、今日すでに我々が目にすることはできなくなった。

## 二 「譜」の文体について

前節では、『洛陽牡丹記』に『牡丹譜』という誤った版本が存在したことについて見た。本節では、この題の「譜」の部分に着目し、人々の『洛陽牡丹記』に対する見方について検討を加えてみたい。

『牡丹譜』の版本は、欧陽脩の友人蔡襄が『洛陽牡丹記』を書にしたことを契機として生じたであろうことは、前節で述べた通りである。では蔡襄の書が成った一〇六五〜一〇六七年以前に『洛陽牡丹記』が「譜」と呼ばれていなかったかといえ、そうでもない。例えば、嘉祐三年（一〇五八）に作られた梅堯臣（一〇〇二〜一〇六〇）「次韻奉和謝王尚書奉正惠西京牡丹」詩に次のようにある。

曩公爲花曾作譜 曩公花の爲に曾て譜を作り  
端相用意隨蝴蝶 端相用意して蝴蝶に随ふ

これは、梅堯臣が欧陽脩の「謝觀文王尚書惠西京牡丹」詩（『居士集』卷七）に和したものである。「公」は欧陽脩を指し、彼がかつて牡丹の「譜」を作ったと詠っている。

る。この例から、蔡襄が『洛陽牡丹記』を書す以前に、すでに本作品を「譜」と呼ぶことは行われていたと分かる。

では、「記」と題されている作品を、何故人々は「譜」と言うようになったのか。まず「譜」の原義について、『釈名』釈典芸第二十に、

譜、布也。布列見其事也。

譜は、布なり。布列して其の事を見るなり。

とあり、事柄を羅列することだと釈している。たしかに、『洛陽牡丹記』花品序第一末尾の品種の列挙と、花釈名第二での各品種に対する解説、また風俗記第三の牡丹栽培法を紹介した箇所は、羅列という表現が当たるような書き方がなされている。

次に、「譜」の文体で書かれた作品が代々どのように扱われてきたのかを見るため、『四庫全書總目提要』卷一一五、『洛陽牡丹記』を収める子部・譜録類の紀昀の説を引く。

劉向『七略』門目孔多、後併爲四部、大綱定矣。中間子目通有增減、亦不甚相遠。然古人學問各守專門、其著述具有源流、易於配隸。六朝以後作者漸出新裁體例、多由創造。古來舊目遂不能該附贅懸疣、往往牽強。隋志譜系本陳族姓、而末載『竹譜』、『錢譜』、

『錢圖』。唐志農家本言種植、而雜列『錢譜』、『相鶴經』、『相馬經』、『鷺擊錄』、『相貝經』。『文獻通考』亦以『香譜』入農家。是皆明知其不安而限於無類可歸、又復窮而不變。故支離顛舛、遂至於斯。惟尤表『遂初堂書目』創立譜錄一門、於是別類殊名、咸歸統攝。此亦變而能通矣。

劉向の『七略』門目孔<sup>はなは</sup>だ多く、後に併せて四部と爲し、大綱定まれり。中間の子目は通<sup>たが</sup>ひに増減有るも、亦た甚だしくは相ひ遠からず。然して古人の學問は各<sup>おのづか</sup>専門を守り、其の著述は源流を具有し、配<sup>か</sup>隸を易ふ。六朝以後作者漸<sup>やや</sup>く新裁體例を出だすは、多く創造に由る。古來の舊目は遂に附贅懸疣を該<sup>か</sup>ぬる能はざるも、往往牽強す。隋志譜系は本族姓を陳<sup>ちん</sup>ぬるも、末に『竹譜』、『錢譜』、『錢圖』を載す。唐志農家は本種植を言ふも、『錢譜』、『相鶴經』、『相馬經』、『鷺擊錄』、『相貝經』を雜列す。『文獻通考』も亦た『香譜』を以て農家に入る。是れ皆明らかに其の安ならざるを知るも類の歸すべき無きに限られ、又た復た窮するも變ぜず。故に支離顛舛し、遂に斯に至る。惟だ尤表『遂初堂書目』のみ譜錄一門を創立し、是に於いて類を別にし名を殊にして、咸統攝に歸す。此れも亦た變じて能く通ずるなり。

『隋書』經籍志・譜系篇に収められる族姓あるいは族譜とは、各宗族の系図を指す。一族の人物が細かく列挙

され、まさしく譜の羅列するという原義にのっとった書き方がされた文である。一方この譜系篇に變則的に入れられた三書のうち、例えば晋・戴凱之『竹譜』は、いくつもの竹の品種を挙げながら、それぞれの特徴を解説した書で、韻文の体裁ではあるものの、『洛陽牡丹記』花釈名第二の、牡丹の各品種に対する解説に非常によく似た体裁となっている。つまり『竹譜』は竹を内容とする点で族譜とは異なるが、事柄の羅列という体裁の面で共通していたため同じ譜系篇に入れられたと考えられる。

「譜」と題される作品は、唐代以前では族譜が大半を占めており、『竹譜』のようなものは稀である。だが、歐陽脩よりも前の時代に『洛陽牡丹記』と類似する体裁の書が見られることは注目すべきであろう。

北宋初期における傾向も唐代とほぼ同じであるが、例えば『筭譜』という作品には筭に関わる事物を羅列するという特徴が見られる。作者の僧贊寧は太宗朝（九七六～九九七）頃に生きた僧侶で、至道二年（九九六）に卒したとされる。『筭譜』で特徴的なのは、筭に関する事柄を一之名、二之出、三之食、四之事、五之説と内容から五部に分けて論じている点で、同じく三部に分けて牡丹を論じた『洛陽牡丹記』と共通する。

以上のように、歐陽脩以前にすでに植物あるいは他の事物を題材とし、細かくその特徴を書き並べるような体裁の作品がわずかであるが作られていた。数の上で多くを占める族譜がそうであるように、「譜」は羅列を定型と

する文体であり、欧陽脩の『洛陽牡丹記』にもそうした特徴が色濃く看取される。宋代に通行した版本が何故『牡丹譜』と題されていたのかという問題も、作品を読んだ当時の人々が数多くの牡丹を書き並べる筆法に引きずられたために生じたのであろう。

では、羅列という特徴のある作品を書きながらも、題に「記」とつけた欧陽脩の意識はどこにあったのであろうか。次節ではこの点について考察を行う。

三 欧陽脩の『洛陽牡丹記』執筆時における意識  
作品の題を「記」とした欧陽脩の意識を探る前に、まず欧陽脩自身が本当に作品を「記」としていたのかを改めて確認しておく。「書荔枝譜後」（『居士外集』卷二三）の一節を引く。制作時期は嘉祐八年（一〇六三）。

余少遊洛陽。花之盛處也。因為牡丹作記。君謨、閩人也。故能識荔枝而譜之。

余わか少きとき洛陽に遊ぶ。花の盛なる處なり。因りて牡丹のために記を作る。君謨は、閩人なり。故に能く荔枝を識りて之を譜す。

欧陽脩は若い頃牡丹で有名な洛陽に居り、そこで「記」を作り、蔡襄は題に見える『荔枝譜』を書いた。これは荔枝の品種や産地、栽培法について記した作品である。全七部に分けられており、第七において品種の列挙が見

られる。作られたのは嘉祐四年（一〇五九）であるから、景祐二年（一〇三五）に書かれた『洛陽牡丹記』よりも後のものであると分かる。

また一つ例を挙げる。『欧陽文忠公集』に収められる書簡文（卷一四四〜一五三）のうち、嘉祐中（一〇五六〜一〇六三）に書かれた「与馬著作」（『欧陽文忠公集』卷一五二、「書簡」卷九）である。

『牡丹記』、『荔枝譜』久欲附呈、以候刻跋尾數十字。  
以是稽遲、不恠不恠。

『牡丹記』、『荔枝譜』久しく附呈せんと欲するも、以て跋尾數十字を刻するを候まつなり。是を以て稽遲す、不恠不恠。

『牡丹記』及び蔡襄『荔枝譜』を献呈しようとしているが、まだ跋尾數十字の板刻が済んでいないため、いまだ果たせずにいることを詫びる。ここでもまた「記」と書いていることから、作品の原題はやはり「譜」ではなかったことが確認される。欧陽脩の基本的意識は「記」にあったのである。

では、作品に「記」と題した理由は何であるのか。まず注目すべきは、題に見られる「洛陽」という地名である。前代に書かれた「記」の作品の中には、題に地名を冠したものが見られ、その土地の風俗に関する事柄を記載し、書籍目録では地理類に入れられる。『隋書』卷三三



「経籍志」史・地理から一部を抜粋する。

洛陽記一卷陸機撰

婁地記一卷吳顧啓期撰

吳興記三卷山謙之撰

南徐州記二卷山謙之撰

會稽土地記一卷朱育撰

會稽記一卷賀循撰

荊州記三卷宋臨川王侍郎盛弘之撰

豫章記一卷雷次宗撰

三巴記一卷譙周撰

湘州記二卷庾仲雍撰

吳郡記二卷晉本州主簿顧夷撰

洛陽伽藍記五卷後魏楊街之撰

湘州記一卷郭仲產撰

南雍州記六卷鮑至撰

齊州記四卷李叔布撰

古くは晋・陸機の撰した『洛陽記』があり、下つては後魏・楊街之の『洛陽伽藍記』等がある。これらは書名の下に卷数が示されているように、一つの書物として扱われている。同様に『洛陽牡丹記』について見れば、「一、版本の問題」で引用した『宋史』芸文志や『直齋書錄解題』『四庫全書總目提要』が「二卷」と記していることから、これも一つの書物とみなされている。

このように地理書という角度から見ると、『洛陽牡丹記』もまたその流れを汲む一つであることが分かる。例えば該書の花品序第一は、冒頭が「牡丹出丹州、延州、東出青州、南亦出越州、而出洛陽者今爲天下第一。」（牡丹は丹州、延州より出で、東は青州より出で、南は亦た越州より出でて、洛陽より出づるは今天下第一爲り。）で始まり、以下洛陽は天地の氣が集まる場所にあるために美しい牡丹が咲くのだという言説に対しての歐陽脩自身の見解や、洛陽在任期に牡丹の盛りを見過ごしてしまったという経験、そして河南府で当時の上司であつた錢惟演に謁した際、牡丹の名が九十種も書かれた衡立を見たことなど、常に洛陽という土地を中心に事柄が記されている。また風俗記第三においては、次に引用する文章のように、土地の風俗を記述するという面が強く表れている。

洛陽之俗、大抵好花。春時、城中無貴賤、皆插花、雖負擔者亦然。花開時、士庶競爲游遨、往往於古寺廢宅有池臺處、爲市井、張幄帟、笙歌之聲相聞。最盛於月陂堤、張家園、棠棣坊、長壽寺東街與郭令宅、至花落乃罷。

洛陽の俗、大抵花を好む。春時、城中貴賤無く、皆花を挿し、負擔の者と雖も亦た然り。花開く時、士庶競ひて游遨を爲し、往往古寺廢宅の池臺有る處に於いて、市井を爲り、幄帟を張り、笙歌の聲相ひ聞こゆ。最も月陂堤、張家園、棠棣坊、長壽寺の

東街と郭令宅とに於いて盛んにして、花落つるに至り乃ち罷む。

開花の時期に洛陽の人々が牡丹に熱狂する様子を描写している。こうした例から、欧陽脩は他のどの土地でもなく、洛陽の牡丹について書き記すことに主眼を置いていたことがわかる。

次に、「記」と「譜」が当時どのような文体として認識されていたかを考えてみよう。『文心雕龍』書記第二十五に次のようにある。

夫書記廣大、衣被事體、筆削雜名、古今多品。是以總領黎庶、則有譜籍簿錄。……故謂譜者普也。注序世統、事實周普。鄭氏譜詩、蓋取乎此。

夫れ書記は廣大にして、事體に衣被し、筆削は雜名にして、古今品多し。是を以て黎庶を總領すれば、則ち譜籍簿錄有り。……故に謂ふ譜は普なりと。世統を注序するに、事は周普に資す。鄭氏の詩を譜するは、蓋し此に取る。

そもそも「書」や「記」といった文章様式は幅の広いもので、多くの事柄に及んでおり、その文書には様々な名が付いている。「譜」は、こうした「記」の幅広い文章様式の一つで、「普」すなわちあまねしという意味であり、家系をあまねく記録することからきているという。ここ

から、「譜」は「記」に包括される一つの文体であることが分かる。欧陽脩以前に成立した『文苑英華』や『唐文粹』といった総集では、いずれも「記」を一つの文体として立てているのに対し、「譜」については全く見当たらない。こうした当時の文体認識の状況から、欧陽脩は作品に題を付ける段階で、より一般に通行していた「記」を採用したという可能性もある。

ただし、欧陽脩は「譜」と題する作品を作らなかつた訳ではない。現在見られる彼の著作の中では、『居士外集』巻二一に収められる「欧陽氏譜図」と、同じく巻二二に収められる「硯譜」の二つが挙げられる。

ここで、欧陽脩が「記」と「譜」それぞれの題をもつ作品の間で、内容あるいは体裁上何らかの書き分けを行っていたかどうかを、比較することによって見てみたい。前者の「欧陽氏譜図」は伝統的な族譜の流れの中に位置付けられる、いわば正体の「譜」であり、六朝以降に見られる新体の「譜」に見られるような特徴を有する『洛陽牡丹記』との比較には適さない。一方「硯譜」は、硯を作るのに使用される石の産地や特徴を述べた文章であり、欧陽脩がこの作品に対しては「譜」と題していることから、そこに文体の使い分けの意識が窺えるため、ここではこれを比較対象として考察を行う。ではまず、「硯譜」の一部を引用する。

絳州角石者、其色如白牛角、其文有花浪、與牛角無

異。然頑滑不發墨、世人但以研丹爾。

歸州大沱石、其色青黑斑斑、其文理微麤、亦頗發墨。

歸、峽人謂江水爲沱。蓋江水中石也。硯止用於川峽、人世未嘗有。余爲夷陵縣令時、嘗得一枚、聊記以廣聞爾。

青州紫金石、文理麤、亦不發墨、惟京東人用之。又有鐵硯、製作頗精、然患其不發墨。往往函端石於其中、人亦罕用。惟研簡便於提携、官曹往往持之以自從爾。

絳州の角石は、其の色 白牛角の如く、其の文 花浪有り、牛角と異なる無し。然れども頑滑にして發墨せず、世人但だ以て丹を研するのみ。

歸州の大沱石は、其の色 青黒にして斑斑たり、其の文理 微麤たり、亦た頗る發墨す。歸、峽の人 江水を謂ひて沱と爲す。蓋し江水中の石なり。硯は止だ川峽に用ふるのみにして、人世未だ嘗て有らず。余夷陵縣令爲りし時、嘗て一枚を得、聊か記して以て廣く聞せんとするのみ。

青州の紫金石は、文理麤く、亦た發墨せず、惟だ京東の人のみ之を用ふ。又た鐵硯有り、製作頗る精なるも、然れども其の發墨せざるを患ふ。往往 端石を其の中に函れ、人亦た用ふること罕なり。惟だ京東の人のみ之を用ふ。惟だ研簡のみは提携に便にして、官曹 往往之を持して以て自從す。

引用したのは「絳州角石」、「歸州大沱石」、「青州紫金石」の三つの石に関わる事柄を記した箇所である。色や模様、世間での用いられ方等が紹介されている。「硯譜」はこうした石の種類に関する説明の列挙がほぼ最後まで貫かれており、文体の特徴がよく意識されていると言える。

一方で、『洛陽牡丹記』は終始牡丹に関する事柄の列挙を行っている訳ではない。花品序第一では、末尾で牡丹の品種が列挙されるまで、一般的な「記」と同様、叙述の体裁をとっている。字数で言えば、八百余字のうち七百三十字程度が牡丹全般についての記述で占められる。また、牡丹の品種の列挙が中心となる次の花釈名第二の中にも、いくらか牡丹全体に関わる記述が含まれる。

牡丹初不載文字、唯以藥載『本草』。然於花中不爲高第。大抵丹、延已西及褒斜道中尤多、與荊棘無異、土人皆取以爲薪。自唐則天已後、洛陽牡丹始盛。然未聞有以名著者。如沈、宋、元、白之流、皆善詠花草。計有若今之異者、彼必形於篇詠、而寂無傳焉。唯劉夢得有「詠魚朝恩宅牡丹」詩、但云「一叢千萬朵」而已、亦不云其美且異也。謝靈運言「永嘉竹間水際多牡丹」、今越花不及洛陽甚遠。是落花自古未有若今之盛也。

牡丹は初め文字に載せられず、唯だ藥を以て『本草』に載る。然れども花中に於いて高第と爲さず。大抵

丹、延巳西及び褒斜道中に尤も多く、荊棘と異なる無く、土人皆取りて以て薪と爲す。唐の則天自り已後、洛陽の牡丹始めて盛んなり。然れども未だ名を以て著る者有るを聞かず。沈、宋、元、白の流れの如きは、皆善く花草を詠む。若今の異なる者有るを計れば、彼必ず篇詠に形るるも、寂として傳無し。唯だ劉夢得のみ「詠魚朝恩宅牡丹」詩有り、但だ「一叢千萬朵」と云ふのみにして、亦た其の美にして且つ異なるを云はざるなり。謝靈運「永嘉の竹間水際 牡丹多し」と言ふも、今越花 洛陽に及ばざること甚だ遠し。是れ落花 古自り未だ若今の盛んなる有らざるなり。

これは花釈名第二の末尾に置かれる一節で、牡丹の鑑賞、栽培が欧陽脩の時代にかつてないほど盛んであったことを言う。また、沈佺期、宋之問、元稹、白居易等の詩における牡丹の詠じ方に言及するなど、文学的な一面も備えている。

以上のように、『洛陽牡丹記』と「硯譜」はともに事柄の羅列という類似した形式を有しながら、牡丹、硯の全般的な記述を含むかどうかで違いが見られる。ここから、欧陽脩が「記」と「譜」二つの文体をはっきりと使い分けていたことが分かる。

欧陽脩が洛陽の牡丹について書き記した文章を「記」と題した理由について、まずこれが前代からの地理書の

流れを汲むものとして著されたという点が挙げられる。地理書には、『洛陽伽藍記』のようにその土地にある建物等を列挙する特徴がすでに見られる。欧陽脩はこうした前代の地理書の書き方を継承しつつ、題材を牡丹という花に変えたのである。また一つの理由として、欧陽脩には「記」と「譜」二つの文体にはっきりとした使い分けの意識があつたことが挙げられる。石の種類による個別の説明の列挙に終始する「硯譜」に対し、牡丹全般についての記述が見られる本作品は「記」と題さねばならなかった。『洛陽牡丹記』にあつては、こうした牡丹全般についての記述とともに、数ある品種や栽培法を詳細に書き連ねることで、当時の洛陽における牡丹の盛況ぶりを具体的に伝えることが企図されていたと言えるのではないだろうか。

ただ、花を題材とする地理書を書くという欧陽脩の意図は、後世の人に正しく汲み取られなかった。前代の地理書を調べたところ、『洛陽牡丹記』と同様に、花卉草木の特徴について列挙したものは見られず、そのような作品は『竹譜』、『筭譜』のように、「譜」と題するのが一般的であつた。そのため、こうした欧陽脩の新しい試みは、かえって後の人々に「譜」の形式を印象付ける結果となつてしまった。後に通行した版本が『牡丹譜』と題されていた理由はここにある。

こうした欧陽脩と後人との意識の違いは、つとに彼と同時代の人物の著作に表れている。先に引用した「書菝

枝譜後」の中で、歐陽脩は自身の『洛陽牡丹記』と蔡襄の『荔枝譜』執筆の動機について、自分は洛陽に赴任した際咲き誇る牡丹に触発されて「記」を作り、蔡襄は閩の出身であるために、かの地方で有名な荔枝を取り上げて「譜」を作ったのだと述べている。蔡襄の『荔枝譜』もまた、閩という土地の風俗について、荔枝を中心に文を書いている点で、地理書の側面を有していると言える。実際、全七部に分けられたうちの第一の冒頭には、

荔枝之於天下、唯閩粵、南粵、巴蜀有之。

荔枝の天下に於けるは、唯だ閩粵、南粵、巴蜀に之有り。

とあり、その後の第二、第三の冒頭にはそれぞれ

興化軍風俗、園池勝處唯種荔枝。(第二)

興化軍の風俗、園池の勝處唯だ荔枝を種うるのみ。

福州種殖最多、延馳原野。(第三)

福州の種殖すること最も多く、原野に延馳す。

とあるように、閩の風俗を記した地理書と見ることができる。またこの作品にも、『洛陽牡丹記』同様唐代の詩人に関する事柄の記述が見られる。第一の中の一節を引用する。

唐天寶中、妃子尤愛嗜、涪州歲命驛致、時之詞人多所稱詠。張九齡賦之以託意、白居易刺忠州既形於詩、又圖而序之。

唐の天寶中、妃子尤も愛嗜し、涪州 歳に命じて驛致せしめ、時の詞人 稱詠する所多し。張九齡 之を賦して以て意を託し、白居易 忠州に刺たりて既に詩に形し、又た圖して之を序す。

しかしながら、以上のような共通性を有しながらも、蔡襄の作品の題は「譜」と付けられている。彼は『洛陽牡丹記』からの影響を受けつつも、地理書の流れを汲むものとしてではなく、羅列の体裁によつて荔枝に関する事柄を書き付けた「譜」の作品として、『荔枝譜』を書いたであろう。あるいは、第二節の冒頭に示したように、欧陽脩の『洛陽牡丹記』は他から「譜」と呼ばれることがあったために、蔡襄もまた『洛陽牡丹記』に倣つて作つた自らの作品を「譜」と題したということも考えられる。

いずれにしても当時の人々にとつて、作品の原題が「記」であつたとしても、それを「譜」と捉えることはそれ程問題ではなかつたと見える。「記」と「譜」が混同された他の例というのはそれほど多く見られる訳ではないが、例えば『新唐書』卷五八「芸文志」で「韋述『開元譜』二十卷」とある作品が、北宋・朱長文『墨池編』卷四では「唐韋述『開元記』」と記されているように、「記」

と「譜」との違いはさほど明確に意識されていたわけではなかった。そもそも『文心雕龍』に見られるように、「譜」は「記」の文章様式の一つであり、その意味では両者を同一のものとして捉えることは可能である。そこにはただ、一般に通行した文体であるか否かという違いしかない。だが裏を返せば、欧陽脩はそうしたわずかな違いの中で『洛陽牡丹記』と「硯譜」を書き分けたということであり、ここに彼の文章作成上の意識が窺える。ところが宋代には、『荔枝譜』を始め花卉草木について論じた「……譜」と題する作品が多く作られるようになり、『洛陽牡丹記』もまたその風潮の中で『牡丹譜』と改題されたと思われる。<sup>13</sup> かようにして、後世には欧陽脩の本来の意図からは外れた題を持つ版本が世に広く行われることとなった。

#### 四 後世への影響

『洛陽牡丹記』が後世の文学に及ぼした影響は、ただ文のみならず、詩作の面にも現れている。その一つとして、牡丹を洛陽の特色として描くという、花と地名とが強い結びつきを見せるようになることが挙げられる。欧陽脩と同時代の詩人では、梅堯臣が多く牡丹を詠んだ詩に洛陽という地名を用いており、下って南宋になっても、多くの詩人が牡丹の美しさとともに、その盛んな土地として洛陽をうたっている。例えば洪适（一一一七—一一八四）「次韻村店得牡丹」詩は

花品稱王擅洛京 花品王と稱して洛京に擅にし  
朱朱白白莫齊名 朱朱白白 名を齊しくする莫し

と、洛陽の牡丹が他に並ぶものが無い程すぐれていることを詠じている。

また一つの例として、陸游の「賞山園牡丹有感」詩を挙げる。

雒陽牡丹面徑尺 雒陽の牡丹は面徑尺  
鄜時牡丹高丈餘 鄜時の牡丹は高さ丈餘

周漢故都亦豈遠 周漢の故都 亦た豈に遠からん  
安得尺筆驅羣胡 安くんぞ尺筆を得て羣胡を驅らん

本詩は庭園に咲く牡丹から、昔この花が盛んであった洛陽、長安を連想し、今や失地となつてしまつた両都に思いを馳せる内容となつてゐる。ここでは洛陽に咲き誇る牡丹そのものに着目してゐるのではなく、自分の身近にある牡丹が遥かなる宋朝の故地と自身を繋ぐ媒介の働きをしている。「牡丹—洛陽」という、花と地名の相關的なイメージを巧みに用いた表現である。

こうしたイメージの形成は、欧陽脩「洛陽牡丹図」詩（『居士集』卷二）の中に見られる。

洛陽地脉花最宜

洛陽の地脉は花に最も宜しく

牡丹尤爲天下奇

牡丹は尤も天下の奇爲り

我昔所記數十種

我昔記す所の數十種

於今十年半忘之

今に於いて十年半ば之を忘る

洛陽は花に最も適した土地柄であり、とりわけ牡丹は天下の奇だと評している。三句目の「我昔記す所」は言うまでもなく『洛陽牡丹記』を指す。「洛陽牡丹図」は自らがかつて書いた作品に基づき作られた詩である。こうした詩作の面からも、欧陽脩が洛陽の地理風俗を書き記すという目的で『洛陽牡丹記』を著したという説が傍証されると思う。

一方唐代では、牡丹の隆盛は長安において見られる。はじめは則天武后の時代にかの地に伝えられ、玄宗の時代以降、愛好熱が高まった。白居易の新樂府「牡丹芳」や「秦中吟」買花には、牡丹をめぐる当時の人々の熱狂ぶりが描かれる。しかしながら唐代においては、牡丹の花そのものに対する美に重点が置かれて詩が詠まれる傾向にあり、「長安特有の牡丹」という、特定の土地との結び付きに目向けられるのではない。欧陽脩が「洛陽の地脉は花に最も宜しく、牡丹は尤も天下の奇爲り」と詠じるように、洛陽の牡丹は常に他の土地のものとの比較の上で最上とされている。このように、宋代の牡丹を詠ずる詩においては、「洛陽の牡丹」という、花と土地との

緊密な関係性の上に立ってその美をうたいあげるという特色が見られる。そしてかかる傾向は、その淵源となる『洛陽牡丹記』が地理書としての性格を有するがゆえに派生的に生じたものだと考えられるのである。

『洛陽牡丹記』の後世に及ぼした影響について、こゝでまた別な角度から見てみる。冒頭で引用した山本氏の記述にあるように、欧陽脩以降、特に宋人の著作には、「……記」あるいは「……譜」という題で、花卉草木の性質や由来を細かく書き記した文献が多く見られる。先に『洛陽牡丹記』との比較を行った蔡襄『荔枝譜』もその一つである。宋人のこうした花譜の執筆について、小川環樹氏は次のように述べられる。

自然物を観察し記述するのは何も宋代に始まるのではない。しかし、それは唐代まではおもに実用的な見地からなされたのであつて、おおむね薬物学の書物「本草」に包括されているのは、そのためである。宋代では自然物の観察・記述が薬物学などから独立した。いろいろな動植物の多数の変種を記載した「梅譜」「菊譜」「竹譜」その他の書物が著わされた。欧陽脩の『洛陽牡丹記』は簡単だけれども、その早いものであり、彼には同じく洛陽の牡丹の品種を題とする詩もある。

小川氏もまた山本氏同様、宋代以降の花譜が、実用的

見地からなされる本草学から独立して著されていることを指摘しており、その早いものとして、欧陽脩の『洛陽牡丹記』を挙げる。ここで注目すべきは、欧陽脩に洛陽の牡丹の品種を題とした詩のあることに言及している点である。それは「禁中見鞞紅牡丹」(『居士集』卷一三)であり、題中に「鞞紅」という牡丹の品種名が見られるとともに、詩中にもこの二字が用いられている。ここでは事物に対する細かな観察が、詩という文学に反映されているのであり、しばしば日常生活の細部に目を向けて作られる宋詩の特性がよく現れている。

このほか、さらに特徴的に牡丹の品種を詠み込んだ詩として、先に引用した「洛陽牡丹図」が挙げられる。制作年は慶暦五年(一〇四五)であり、嘉祐四年(一〇五九)に詠まれた「禁中見鞞紅牡丹」よりも早期の作である。

當時絶品可數者  
魏紅窈窕姚黃妃  
壽安細葉開尚少  
朱砂玉版人未知  
傳聞千葉昔未有  
只從左紫名初馳  
四十年間花百變  
最後最好潛溪緋

當時の絶品の數ふべき者  
魏紅 窈窕として姚黃 妃たり  
壽安細葉 開くも尚ほ少く  
朱砂 玉版 人未だ知らず  
傳へ聞く千葉は昔未だ有らずと  
只だ左紫に從ひて名 初めて馳す  
四十年間 花 百變し  
最後 最も好きは潛溪緋

鞞紅鶴翎豈不美  
斂色如避新來姬

鞞紅 鶴翎豈に美ならざらんや  
色を斂むること新たに來たる姫  
を避くるが如し

何況遠說蘇與賀

何ぞ況んや遠く蘇と賀とを説く  
をや

有類異世誇嬌施

類有り異世に嬌施を誇る

ここでは「魏紅(魏花)」、「姚黃」、「壽安」、「朱砂(朱砂紅)」、「玉版(玉板白)」、「左紫(左花)」、「潛溪緋」、「鞞紅」、「鶴翎(鶴翎紅)」、「蘇(蘇家紅)」、「賀(賀家紅)」のおよそ十一品種が詠み込まれており、いずれも『洛陽牡丹記』の中に見られる名前である。欧陽脩の牡丹に対する愛好と観察眼が端的に反映されていると言えよう。

欧陽脩に倣い、後の文人たちも牡丹を詠んだ詩の中でしばしば細かい品種名を用いている。南宋最初の宰相として知られる李綱(一一〇八—一一四〇)の「志宏以牡丹醢醢見遺戲呼牡丹為道州長且許時餉醢醢作二詩以報之」詩に次のようにある。

我昔驅車遊洛陽  
正值名圃開花王  
嫣然萬本鬬妍媚  
彫檻綽約羅紅粧

我昔 車を驅りて洛陽に遊び  
正に名圃の花王を開くに値ふ  
嫣然たる萬本 妍媚を鬬はし  
彫檻 綽約 紅粧を羅ぬ



輕紅檀點玉版白

輕紅檀點玉版白

細葉次第舒幽房

細葉は次第に幽房に舒ぶ

玉奴纖指尚餘捻

玉奴の纖指尚ほ捻を餘し

鶴翎坐恐隨風翔

鶴翎坐るに恐る風に隨ひて翔るを

就中品格最奇特

就中品格最も奇特なるは

共許魏紫并姚黃

共に許す魏紫並びに姚黃なり

千金不惜買一醉

千金惜しまず買ひて一醉するを

少年渾欲花底狂

少年渾て花底の狂たらんと欲す

歸來試作牡丹譜

歸り來たりて試みに作る牡丹の譜

未服秉筆惟歐陽

未だ服せず筆を秉るは惟だ歐陽

のみなるに

「洛陽」、「牡丹譜」、「歐陽」といったことばが使用されていることから、『洛陽牡丹記』を念頭に置いた詩作であると考えられる。また、「輕紅」、「檀點（倒暈檀心）」、「玉版白」、「鶴翎」、「魏紫」、「姚黃」と、『洛陽牡丹記』

に見える牡丹の品種名をいくつも並べることで、洛陽の牡丹の盛んな様子が具体性をともなうて示される。同時に、細葉である輕紅、檀點、玉版白と、名前が鳥の飛翔を連想させる鶴翎、そして『洛陽牡丹記』の中で特にす

ぐれたものとして上位二種に位置付けられる魏紫、姚黃をうまく詠じ分けることで、内容に単に品種の列挙を行った場合とは異なる彩りを与えている。

また、歐陽脩を真似て『天彭牡丹譜』を著した陸游は、例えば「栽牡丹」詩の中で次のように詠んでいる。

攜鋤庭下斲蒼苔

鋤を庭下に攜へて蒼苔を斲り

墨紫輕紅手自栽

墨紫輕紅手自づから栽う

老子龍鍾逾八十

老子龍鍾して八十を逾ゆ

死前猶見幾回開

死の前猶ほ幾回か開くを見ん

歐陽脩や李綱の詩にも見られる「輕紅」の他、「墨紫」という品種名が用いられている。この品種について、『洛陽牡丹記』では、

葉底紫者、千葉紫花、其色如墨、亦謂之墨紫花。

葉底紫は、千葉の紫花にして、其の色墨の如く、亦

た之を墨紫花と謂ふ。

と書いているように、葉底紫という品種の別名である。陸游が『洛陽牡丹記』の中の細かい名称にまで目をやり、ことばを選んでいることが分かる。同様の例は、同じく南宋の人胡仲弓（生没年不詳）の「梅坡席上次韻牡丹」詩にも見られる。

為甚花神受氣偏

為甚ぞ花神氣の偏るを受くる

却來南地逞春妍

南地に却り來たるに春妍を逞し

くす

鞞紅未數青州種

鞞紅は未だ青州の種に數へられず

粉白<sup>(25)</sup>猶疑洛浦仙

粉白は猶ほ疑ふ洛浦の仙かと

「鞞紅」について、『洛陽牡丹記』では

鞞紅者、單葉深紅花、出青州、亦曰青州紅。

鞞紅は、單葉深紅の花にして、青州より出で、亦た青州紅と曰ふ。

と記しており、青州という土地との関連が見られる。胡仲弓の詩でも「青州」ということが使われており、『洛陽牡丹記』の記述を踏まえた表現であると考えられる。微に入り細を穿った表現であると言えよう。

一方で、宋詩に見られるかかる用語は、唐詩においては見られなかった。<sup>(26)</sup> 唐代の詩人が牡丹を詠む場合には、ただ「牡丹」とするか、あるいは「花」と書くばかりのようである。

以上のように、宋代の牡丹の詩には具体的な品種の名を用いることで緻密な表現を行っているものが多く見られ、この時代特有とも言える、題材の拡大の一側面を映し出している。こうした詠じ方の端を発したものは、おそらく欧陽脩の作った「洛陽牡丹図」であり、これは後述する作品のいずれよりも多くの品種名を含んでいる。

さらにそれは、欧陽脩がかつて書いた『洛陽牡丹記』を

踏まえて作られている。そもそも『洛陽牡丹記』は、欧陽脩が洛陽の牡丹の美しさに触発されて執筆した作品であり、また該書の花釈名第二では唐人の牡丹の詩に言及するなど、元来欧陽脩の詩作活動と関連する要素を含んだ書物である。その『洛陽牡丹記』は、詩にイメージや題材の広がりを与え、それを継承した後人とともに宋代の特徴の一側面を創り上げていった。

#### おわりに

本稿では、欧陽脩『洛陽牡丹記』の「記」としての異質性と、この作品が文学史の中でどのような位置にあるのかという点から考察を行った。

『洛陽牡丹記』の特徴として最も目を引くのは、洛陽の牡丹の品種や栽培法を並べた書き方である。これは欧陽脩がその流れを汲むものとして『洛陽牡丹記』を著した地理書の、その土地にある建物等を列挙する体裁によっている。欧陽脩は牡丹という花を題材としてこれを書いたが、それは従来の地理書には見られないものであった。『竹譜』、『筍譜』のように、花卉草木を列挙した作品は、前代の文学の中では「譜」と題されており、それを知る者の目には、「記」と題される本作品は奇異に映る。このように花を題材として地理書を書いた点が、『洛陽牡丹記』の異質性である。

宋代には『洛陽牡丹記』から影響を受けて作られた作品が多く存在するが、これが後世に及ぼした影響という

のは、文だけではなく詩作の面にも現れている。はじめに欧陽脩が『洛陽牡丹図』という『洛陽牡丹記』の中に見られる品種名を多く詠み込んだ詩を作り、他の文人も彼をまねて同様の詩を詠んだ。こうした牡丹の細かい品種名が詩のことばになっていく契機となつたのが本作であり、ここに『洛陽牡丹記』が文学史の中で果たした役割を見ることができよう。

欧陽脩が手掛けた作品のジャンルは多岐にわたっているが、それらは決して別個のものではなく、それぞれが連関して成つたもののように見える。『洛陽牡丹記』はそうした欧陽脩の文学の特徴を表す一つの例と言えるであろう。

## 注

(1) 『居士集』は欧陽脩が晩年に自身の手で編んだ唯一の詩文集であり、『居士外集』は『居士集』の選より漏れた作品を、南宋の周必大(一一二六—一二〇四)らが集輯したものである。これら二集の関係については、東英寿『欧陽脩の『居士集』編纂の意図』(『中国文学論集』十七、一九八八)に論述がある。

(2) 興膳宏編『中国文学を学ぶ人のために』世界思想社、一九九一年 第二章「詩文・宋」一一二頁。

(3) また、『郡齋読書志』巻二・農家類に『牡丹譜』一卷、右皇朝歐陽修撰。修初調洛陽從事、見其俗重牡丹、因著花品凡三篇。』(『牡丹譜』一卷、右皇朝歐陽修撰。修初め洛陽從

事に調りしとき、其の俗牡丹を重んずるを見、因りて花品凡そ三篇を著す。)とある。「花品凡そ三篇」とあることから現在の『洛陽牡丹記』と同じ三部の体裁であることは分かるが、内容まで一致するかは不明。

(4) 以下、引用する欧陽脩の詩文は全て四部叢刊本『欧陽文忠公集』に拠る。

(5) 「承平」は、太平が長く続くことを意味することばであるが、南宋の文人は時に「承平時」や「承平日」の形で、北宋の世を指して用いる。例えば、陸游「春雨」詩(劍南詩稿)巻二六に「士節承平日、人材南渡時。後生聞見狹、撫枕歎吾衰」(士節 承平の日、人材 南渡の時。後生 聞見狭く、枕を撫して吾の衰へたるを歎ず)とある。

(6) 天理大学附属天理図書館所蔵『欧陽文忠公集』巻二二に附された「又續添」には「後有熙寧三年二月一日書九字」と書かれている。熙寧三年は一〇七〇年。

(7) 『欧陽文忠公集』の編纂期間については、東英寿『欧陽脩新発見書簡九十六篇—欧陽脩全集の研究—』(研文出版社、二〇一三年)を参照した。

(8) 四部叢刊本『宛陵先生集』巻五六。

(9) 四部叢刊本を使用。

(10) 『四庫全書総目提要』巻一一五「子部・譜録類」『笛譜』の記述を参照。

(11) 四部叢刊本を使用。

(12) 以下、『荔枝譜』の引用は百川学海本に拠る。

(13) 例えば、『宋史』巻二〇五「芸文志」子類・農家類に見ら

れる「譜」を題に持つ作品二十（欧陽脩『牡丹譜』を除く）のうち、『歐陽文忠公集』の編纂が行われた紹熙二年（一一九一）～慶元二年（一一九六）以前に著されたと分かるものは十五篇あった。この他書目類には載っていないが、胡元質『牡丹譜』、范尚書『牡丹譜』といった作品もある。前者については、制作年は一〇二一年（『中国古代牡丹譜録研究』附録一 中国古代牡丹譜録一覧表、李娜娜等、『自然科学史研究』第31巻、二〇二二年）であり、後者については、久保輝幸氏が作者の可能性のある人物として范仲淹（九八九～一〇五八）、范純仁（一〇二七～一一〇二）、范雍（九七九～一〇四六）を挙げており（『宋代牡丹譜考釈』一 宋代牡丹譜文献解題、『自然科学史研究』第29巻、二〇一〇）、仮にこれが一〇三四年以前に書かれたものだとすると、胡元質『牡丹譜』とともに、欧陽脩『洛陽牡丹記』以前にそうした題の作品が存在していたことになる。そして、これらが後に『洛陽牡丹記』が『牡丹譜』に変えられるという現象に繋がったと考えることもできる。

(14) 四部叢刊本『盤洲文集』巻五。

(15) 『劍南詩稿校注』巻八二（錢仲聯校注、全八冊、上海古籍出版社、一九八五年）。

(16) 佐藤武敏氏は、宋代に園芸や花卉に関する書物が多数著された背景として、民間に専門の花弁栽培業者が多く現れ、花卉の商品生産が広まったことを挙げる（『中国の花譜』平凡社東洋文庫 622、一九九七年、「中国の花譜について」宋代の花譜 一七頁）。

(17) 「宋代の詩人と作品の概説」（『小川環樹著作集』第三冊、筑摩書房、一九九七年）一六頁。

(18) 「千葉」は品種名ではない。佐藤武敏氏によると、千葉は花びらの八重のことであるという（『中国の花譜』『洛陽牡丹記』花釈名第二注（二）、六四頁）。『洛陽牡丹記』では、姚黄、牛黄、魏家花、細葉寿安、粗葉寿安、九蕊真珠紅、丹州花、延州花、左花、葉底紫、潛溪緋に千葉の語が使用されている。なお、牡丹を指して千葉ということばが使われた例は、欧陽脩以前の詩には見られない。

(19) 「斂」、四部叢刊本は「斂」に作る。両字はしばしば混用されるが、ここでは『歐陽修詩文集校箋』（全三冊、洪本健校箋、上海古籍出版社、二〇〇九年）に拠って改めた（上冊、五五頁）。

(20) 括弧内は『洛陽牡丹記』での呼称を表す。

(21) 『全宋詩』巻一五四六（北京大学出版社、一九九六）。

(22) これら三品種のうち、『洛陽牡丹記』の中で細葉と明記されているのは「玉版白」一種だけである。

(23) 『劍南詩稿校注』巻六六。

(24) 『全宋詩』巻三三三六（北京大学出版社、一九九八）。

(25) 「粉白」もまた牡丹の品種を指し、陸游『天彭牡丹譜』では「醉西施」と記される。

(26) 一例、王建の「千主簿庁看花」詩（『王建詩集』巻九）に「鶴翎」という『洛陽牡丹記』の「鶴翎紅」と類似した名が見られたが、尹占華氏によれば、これは鶴草という草の名であり（『王建詩集校注』四川出版集團巴蜀書社、二〇〇六、

三七六頁)、牡丹ではない。